特集 空き家問題を考える

十月五日（土）、美浜町内で空き家の活用に関する催し「空き家マッチングツアー」と「空き家の利活用について考えよう」が行われた。近年地方における空き家の増加が問題となっており、地域の衰退や、防災・防犯・景観などに悪影響を及ぼすため、解決が急がれている。以前からこの問題に関心があった菅原愛夏さん（三-四）と新聞部が二つの催しに参加し、地域の取り組みや課題について勉強した。

住民十色のまちづくり
空き家マッチングツアー

空き家マッチングツアーには、町内外から九人が参加し、スタッフ十五人と共に五件の物件を回った。出発前に主催者でふるさと福井サポートセンター（ふるサポ）理事長の北山大志郎さんは「地域や家のことをたくさん知ってください」と参加者を歓迎した。平成二十四年から続いているこのツアーは今回で十六回目。物件を紹介しながら美浜町の魅力を伝えることで、移住者を迎え空き家を活かすことが目的。これまでに五十二組のマッチングが完了し、二十五組が移住した。移住以外では移住体験施設などに利用されている。今回、愛知県から参加したご夫妻は「週末に釣りなどをして過ごすための別荘を探している」と話した。兵庫県でパン屋を営むご夫妻は「以前に見た嶺南の海の美しさが忘れられない。近所の方に利用してもらえる地域のパン屋になりたい」と語った。

美浜町の空き家は、平成二十七年時点で約四百二十軒あり、総住宅の約十%に及ぶ。年々増加しており深刻な状況だ。北山さんは、所有者の意思決定に時間がかかることが課題だと言う。空き家になったら放置せず、誰かに住み継いでもらう。この早期決断を促すことを中心に活動しているとのこと。ふるサポでは「どうする？空き家」という空き家の意思決定緊急度診断サイトを用意している。誰もが自分ごととして空き家問題に取り組むまちづくりができればと期待を込めた。（前田鈴菜）

築五十五年の木造住宅

スタッフの熱い思いに迫る
麻生区『山野草の家』

運営方法などについて語るスタッフ

麻生区の『山野草の家』は三年前に空き家となった家を再利用し、地域のお年寄りが集う憩いの場となっている。毎月五の付く日の午後一時～四時まで自由に利用できる。玄関の黄色い旗がオープンの目印だ。スタッフは現在の家主である長谷川美恵子さんをはじめ約十名。毎回数名ずつ当番を決め、ボランティアで運営している。

内容は折り紙や紙芝居、手遊び、早口言葉などスタッフが工夫を凝らす。時には講師を招いて熱中症や防災の勉強会、体操教室を行うことも。最近では近隣地区の人が企画を持ってきてくれるなど、輪が広がりつつある。また、スタッフ全員が介護経験者のため、お互いに悩みを打ち明け、相談し合える癒しの場にもなっている。

三年前、麻生区では認知症の高齢者が増える中、家に閉じこもってしまう人が多かった。そんな時、前の家主さんに「やりたいことがあるなら使っていい」と言われた長谷川さんは、躊躇せず譲ってもらったという。始める時は勇気がいったが、婦人会で仲間を募り、他の地区を視察して準備をした。現在は平均七～八人の方が訪れている。利用者は山野草の家に行くために、午前中は畑仕事を頑張ったり、おしゃれをするようになったり、家庭での会話が増えたりと生活に張りが出てきたようだ。スタッフは「嬉しそうな顔を見られることが私たちの喜び」と語る。また、今後の目標について「この取り組みを知ってもらい利用者が増えること。そして、末永く続けるためにもスタッフに無理がかからないようにすること」とした。山野草の家では一緒に活動してくれる新たなスタッフを募集している。（柴田理瑚）

目印の旗（右）とスタッフのエプロンは幸せの象徴の黄色

前の家主のおばあさんが山野草が好きだったことが『山野草の家』の名前の由来

佐野区の取り組み
助け愛の気持ちで活性化

毎年発行される広報誌『水土景』

佐野区は人口約八十五人でありながら、とても元気な村だ。佐野区は平成十九年より、国・県・町が協力して行う『農地・水・環境保全活動』に参加している。この活動主体を『水土景の会』と名づけ、老人会、子ども会、婦人会、農業者が一つとなって、村の農地や自然について学びながら環境保全に努めてきた。活動内容は道路を舗装したり、側溝の泥を上げたり、花畑を作って景観を良くしたりと多方面に渡る。年長者は若者に技術を伝授し、協力して活動を続けている。

水土景の会代表の大塩友之さんは、佐野区の村づくりについてこう語る。「以前は区会で話し合われたことが各家庭に伝わらず、地域活動を知らない人もいた。特に、家庭を切り盛りするお母さん方に大切なことが伝わらないのはいけないと考え、広報誌の作成を始めた。区民の写真をたくさん載せ、大きな文字で読みやすくする工夫をした。活動が知られると一緒に動いてくれる人が増え、村に愛着を持つ人が増えた。夏の活動報告会には、百人を超える人が参加するようになった」広報誌が人々の気持ちを繋いだのだ。

佐野区や麻生区の取り組みを知り、村づくりには人々の深い思いと努力があることが分かった。地区間の交流や情報交換で、地区を越えた活性化に繋がるのではないだろうか。大塩さんのお話で「人は会えば会うほど愛おしくなる」という言葉が印象的だった。助け合いの気持ちが家族のような絆をつくる気がした。（渡辺治紀）

菅原愛夏レポート
地元の良さを守りたい

私が空き家問題に関心を持ちはじめたのは、私の地元名田庄の過疎化に危機感を覚えたことがきっかけです。そんな時、美浜町社協が主催する空き家のボランティアセミナーを知り、私の地元にも役立つことが学べるかもしれないと、興味本位で参加しました。その中で、空き家をリノベーションして新しい住民を県内外から迎えたり、古民家カフェとして活用したりしていることを知り、空き家の可能性にとても興味がわきました。美浜町以外に、おおい町や越前町のセミナーやイベントにも参加しました。

すると、私にも地元の空き家を活用し、自分のやりたいことや、町おこしに役立つ何かができるのではないかと考えるようになりました。そして今では、地元を離れた人が戻って来られる場所を残すこと、今あるものをよりよく活用して地元の発展に繋げることが私の夢になりました。空き家に限らず、地元の小さな良さを大事に守り広げていきたいです。

これから進学や就職で地元を離れる人が多いと思います。今一度、故郷の良さを見つけてみてください。故郷のためにできることが、みなさんにもきっとあるはずです。